

# ルソー「文明論」の拠点

飯 岡 秀 夫

A definite point of Rousseau's "Discussion on Civilization"

Hideo IIOKA

## 目 次

### 序. 文明批判の「神話」

#### I. 内観的方法 — 「確信」の根拠 —

#### II. 「自己」から「神」へ

#### III. 人間この「自由な者」 — 第三の信条 —

#### IV. ルソーの「生死」観 — 「魂の保存」と「神の裁き」 —

#### V. ルソーの「良心」論

### 結び. 「文明」と「良心」

※ルソーの引用文は、すべて、Oeuvres Complètes de Jean - Jacques Rousseau, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard からのもので、その巻数とページ数を示した。なお引用書名の略記は次のとおりである。

E. … Emile, ou de l'éducation, 『エミール』

B. … Lettre à Christophe Beaumont, 『ボームンへの手紙』

S. … Discours sur les sciences et les arts, 『学問芸術論』

G. … Du contract social [1<sup>ère</sup> version], 『ジュネーブ草稿』

d'A … Lettre à d'Alembert, 『ダランベールの手紙』

C. … Les confessions de J-J. Rousseau, 『告白』

R. … Les rêveries du promeneur solitaire, 『孤独な散歩者の夢想』

D. … Rousseau juge de Jean-Jacques, Dialogues, 『ルソー、ジャン＝ジャックを裁く—対話』

N. … Julie, ou la Nouvelle Héloïse, 『新エロイズ』

I. … Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes, 『人間不平等起原論』

岩. … 岩波文庫

全. … 『ルソー全集』 白水社

## 序. 文明批判の「神話」

ルソーの「文明論」は魂の腐敗・墮落した彼の時代に対する告発である。「私は自分の世紀にむかって苛酷な真理を述べた」(B., t. IV, P. 995, 全七, P. 525)。ルソーはこの「苛酷な真理」を拠点として、彼の時代を撃った<sup>(1)</sup>。ルソー自身の生とルソー「文明論」の拠点をなす、この「苛酷な真理」とは何か。本稿のテーマはその追究の一点にしばられる。

ルソーの「文明論」が、究極的には、人間「倫理」——義務を生きる「有徳人」——の回復をめざしたものであることはこれからの展開が示すところである。それに関してルソーはいう。「宗教というものをいっさい忘れてしまうとやがては人間の義務を忘れることになる」(E., t. IV, P. 561, 岩中, P. 113)<sup>(2)</sup>。ルソーは「倫理」の源泉に「宗教」をみているのだ。

ここにルソーとフランス啓蒙思想家(「フィロゾーフ」)との決定的な別れがある<sup>(3)</sup>。

ルソーは「啓蒙の時代」にあつて、デイドロ、ドルバックら理神論から無神論さらには唯物論への道をつき進む「啓蒙の哲学」に抗して自分自身の「神話」——文明批判の拠点となる「神話」——を構築した<sup>(4)</sup>。「サヴォアの助任司祭の信仰告白」(以下これを「信仰告白」と略す)——いわゆるルソーの「自然宗教」——がそれである<sup>(5)</sup>。

ルソーが彼の時代を撃つ拠点となったかの「苛酷な真理」とは、実は、「信仰告白」に凝結したその思想に他ならない。その意味で「信仰告白」の思想は、ルソー自身の思想的拠点であると共に、ルソー「文明論」の思想的拠点でもあるのである。

さて、これからの展開が示すように、ルソーの「文明論」には三人の「人間像」が登場する。「自然人」と「社会人」と「有徳人」である。「自然人」というのは「文明以前」、「文明ゼロ」の時点で、「自然の体系」にいだかれ自然に同化して生きる「人間像」をいう<sup>(6)</sup>。「社会人」というのは人間の文明化の歩みのなかで魂を腐敗・墮落させて邪悪になり、「利己愛」中心に、アイデンティティを失って生きているルソーの時代の「人間像」——「ブルジョア的人間像」——をいう<sup>(7)</sup>。ルソーが告発しつづけたのはこの「人間像」に対してである。「有徳人」というのは人間の文明化の歩みのなかで「良心」を獲得し、自分の課せられた義務を果して生きている「人間像」をいう。ルソーが希求したのは、この「人間像」であり、それはルソー「文明論」の拠点に立つ人間像なのである。

ここで我々が注意しなければならないのは、この三人の「人間像」は、実は、ルソーの心のなかに——ということは当然我々人間の心のなかに——住みついている「ルソー自身(我々自身)の人間像である」ということである。ということはルソーの「文明論」はルソー自身の問題であると共に、我々自身の問題でもある、ということである。ルソーについてみれば、ルソーはその生涯に於てこの三人の「人間像」を生き、そして、この三人の「人間像」のあいだを揺れ動いて自らを「有徳人」として生きることを志向して人生をおえているのである。

何故ルソー(我々)の心のなかにはこのような様々な人間像が住みつき、文明上の諸問題を現出

せしめるのであろうか。それについてはこれからの展開であきらかにされるが、それはルソー「文明論」の核になる問題である故に、結論を先どりしてその要点を示しておく必要があるであろう。

それはルソーに従えば人間が「魂」と「肉体」という二つの実体から構成されているからに他ならない。そのことによって人間は、能動的に、情念を支配して「自由である」（「有徳人」）と同時に、受動的に、情念に支配されて「奴隷でもある」（「社会人」）のだ。ルソーは自分の心の葛藤から、その三人の「人間像」は人間本性に由来することを看破したのである。そして同時代人と自分の心の葛藤の観察から三人の「人間像」をつかみとり、それをもとに「文明論」を展開しているのである。

若き日のルソーはゲーム師との出会いによって邪悪な「社会人」への墮落をまぬがれ<sup>(8)</sup>、レ・シャルメット体験で思想的核を形成している<sup>(9)</sup>。このレ・シャルメットで形成された思想的核はヴァンセンヌの森での靈感となって噴出することになる。いわゆる「ヴァンセンヌ体験」<sup>(10)</sup>がそれである。ルソーはその体験から「有徳人」への再生を志向する。

いわゆる「ヴァンセンヌ体験」がルソー思想の、従って、「ルソー文明論」の原点になっていることは疑いない。そこでの靈感によって与えられた「無数の偉大な真理」は三つの主要な著書——第一論文（『學問・芸術論』）と第二論文（『不平等論』）と『教育論』——に散在しているとルソーはいっている。その「無数の偉大な真理」がその後のルソーの実存をかけた思索によって結晶化したものが「信仰告白」なのである。

いまここでその「無数の偉大な真理」の最も根本になる言葉を第一論文からとり出し、それを提示しよう。

「おお徳よ！ 素朴な魂の崇高な学問よ！ お前を知るには多くの苦勞と道具とが必要なのだろう。お前の原則はすべての人の心に中に刻みこまれていはいはしないのか。お前の掟を学ぶには、自分自身の中にかえり、情念を静めて自己の良心の声に耳をかたむけるだけでは十分ではないのか。ここにこそ真の哲学がある。」（S., t. III, P. 30, 岩., P. 54）。

ここでルソーは「真理」についての「直覚的確信」<sup>(11)</sup>をえたのである<sup>(12)</sup>。「徳」のなんたるかを知るためには「良心の声に耳をかたむけるだけで十分ではないか」。ルソーの文明批判の根本はこの言葉に集約されているのだ。

「ヴァンセンヌ体験」はルソーの心に「大転換」をもたらす。ルソーの「回心」・「再生」である<sup>(13)</sup>。ルソーは真理と自由と美德に対する情熱によってその他の世俗的な「諸情念」を支配・克服し、自ら「有徳人」として生きるべく、「自己改革」を実践しはじめる<sup>(14)</sup>。ルソーの「自己革命」は外面的なことがらにとどまらなかった<sup>(15)</sup>。さらにルソーは「自分の心を峻厳な審査にかけて、今後の内面的生活を規制し、死に臨んでもかくあれかしと思うような境地に到達したい」（R., t I, P. 1015, 岩., P. 41）と考え、「瞑想」と「思索」とによって、その「根本原則」の探求にのり出した。「ヴァンセンヌ体験」で得たあの「直覚的確信」をベースにして「真理」の探求にのりだしたのである。

「全力をつくした探求の末に」ついにルソーは「わたしの理性が採用し、心情が確認して、すべては情念の沈黙のうちに内心の承認を得たしるしをおびている根本原則」(R., t I, P. 1018, 岩., P. 46)、「生涯にたいする確乎たる行動の基準」をつかみとる。「信仰告白」にもりこまれた思想がそれである<sup>(16)</sup>。

ルソーが生涯にわたって安住することになる「安心の基礎となる不動の原則」、「運命や人々がどうあろうとも、わたし(ルソー)を幸福にしてくれるただひとつの体系」、我々の当面の課題に即していえば、ルソーが彼の世紀になげかけた「苛酷な真理」、つまり、ルソー「文明論」の思想的拠点とはどういうものか。以下、その内容をみていくことにしよう。

## I. 内観点方法 —「確信」の根拠—

序で論じたように、ルソーは「ヴァンセンヌ体験」での回心・再生から、よく生きるために必要な「自分自身のための哲学」の構築にのり出した。「安住出来る思想体系」、「自分の行動と信仰の不変の基準」。ルソーは「自己愛」とそれに通底した「人類愛」、さらに、それらに発する「真理愛」からルソー自身のための——そして「人類のための」——「神話」の構築にのり出したのである。

ルソーはみずから構築した「神話」についてボーモンに「信じ、断言し、強く確信している」(B., t. IV, P. 997, 全. 七, P. 528) と伝えている。

ルソーが彼の世紀にむかってなげかけた「苛酷な真理」とは、実は、ルソーのこの「確信」——「良心」と「理性」にもとづく、ルソーの断固とした態度決定——以外の何ものでもない。ルソー自身が「確信」し、断固態度決定しているが故に、ルソー自身の「真実」が「真理」なのだ。

ルソーのいう「苛酷な真理」の追究をめざす本稿は、それ故、ルソーが断固態度決定をする、ルソーの「確信」の根拠——ルソーはいかにして「確信」をえたのか——を問うことからはじめねばならない。

既存の宗教や教説は有神論・無神論を問わずルソーに確信の材料を提供しない<sup>(17)</sup>。それらはルソーをまどわすだけだ。それ故ルソーは自ら「確信」できる体系の自己創造にのり出す。「真理愛」を推進力として。

自己の「神話」つまり自ら「確信」できる体系を創造・構築するにあたって、ルソーが唯一「教えを乞うた」のは「内なる光」だけであった<sup>(18)</sup>。ここでルソーがいう「内なる光」<sup>(19)</sup>とは人間が生得的にもつ「自己完成能力」——感覚に出立する、「想像力」・「悟性」・「理性」——の偽きと考えられる<sup>(20)</sup>。

「内なる光」は思春期以降におこなわれる、「感情によって理性を完成せしめる教育」——「人類愛」や「真理愛」といったより高まった感情つまり能動的な「精神的感性」<sup>(22)</sup>によって「感覚的理性」を高めそれを「知的理性」へと導く教育——によってますますその光を増していく。感覚の領域をこえ、神秘の領域にまで「内なる光」という「想像力」は入りこんでいく。そしてついにはその光

は、「想像力」・「悟性」・「理性」の作用としての思索のはてに、「天地宇宙」の究極にまで到達する。

「宇宙的秩序」や「神」についての「観念」を獲得するのである。

しかしルソーにあっては「思索」（「悟性」や「理性」の偽き）がつかみとった「観念」がそのままルソーに「確信」を与えるわけではない。ルソーにあっては「観念」はたとえそれがどんなに正確・精密に構成されようと、そのままで「真実」→「真理」にならないのだ。

何故ルソーにあって「観念」がそのまま「確信」（「真実」→「真理」）にならないのか。

我々はここでルソーが「神話」構築にあたって採用した「内観的方法」に遭遇することになる。ルソーが自らの真実→真理を確信するためには「思索」に加えるにさらに「瞑想」——「心情」の同意——を必要としたのだ<sup>(23)</sup>。

この「思索」に加える、「瞑想」——「心情」の同意——が必要であるという方法の採用は、ルソーの生涯をつらぬく<sup>(24)</sup>次のごとき確信にもとづいている。

「わたしたちにとっては、存在するとは感じることだ。わたしたちの感性は、疑いもなく、知性よりも先に存在するのであって、わたしたちは観念よりも先に感情をもったのだ。」  
(E., t. IV, P. 600, 岩・中, P. 17)。

「存在するとは感じることだ」、別言すれば、「我感ずる、故に、我あり」。これがルソーの確信するところである。そこにルソーの確信の根拠——直覚的明証性——がある。ルソーはこの確信の根拠、直覚的明証性のもとに、「判断すること」（理性の偽き）と「感じること」（感情の作用）を区別し、「理性よりも感情」を優先させ、究極の「確信」の根拠を「感情」に求めたのである。

「瞑想」という方法は情念を沈黙させ、無意識にねむる「深層心理」にまで至り、心のおくそのものを掘りおこすことによって、「感情」を高めると共に、「感情」を明徹にとき澄まし、もって人間をして直覚的明証性のもとに「確信」することを可能ならしめるものなのである。

こうしてルソーにあって「確信」は「理性」（「思索」）と「感情」（「瞑想」）との協働によって与えられることになる。「感覚」が直接に与える対象や、「理性」が媒介的に与える観念（体系）を「感情」が直覚的明証性のなかで承認した時、その時はじめてルソーの心のなかで「内面的な確信」が生ずるのである。

これからみていくルソーの「神話」はこうして獲得されたルソーの確信のひとつひとつの積み重ね——「わたしの理性が採用し、心情が確認して、すべては情念の沈黙のうちに内心の承認を得たしるしをおびている根本原則」(R., t I, P. 1018, 岩・中, P. 46)——の上に構築されているのである。

## Ⅱ. 「自己」から「神」へ

「わたしは何者なのか」。「わたしという存在の原因は何であり、義務の規則は何であるのか」。ルソーはこの問に対する「確信」できる回答を自らの手で獲得するために、まず、「確信」の根拠を

「確信」する。「我感ずる、故に、我あり」。この「自己存在」の「確信」こそ、ルソーの「確信」の根拠——ルソーが直覚的明証性をもって確信する根本の真理——である。

「わたしは存在する。そして感官をもち、感官を通して印象をうける。これがわたしの感じる第一の真実であって、わたしはそれを承認しないわけにはいかない」(E., tIV, P. 570, 岩・中, P. 129)。

ルソーはこの「自己存在」の確信を原点として、そこから、「内なる光」という有限でちっぽけな人間能力を唯一頼りにして、「神とその英知」の「存在確信」にむかって一人旅立つ。

以下、「自己」から「神」へ至る、神とその英知の「存在確信」の過程を4点にまとめて示すことにしよう<sup>(25)</sup>。

1. 「自己の存在」とは区別された、「天地宇宙の存在」の「確信」。⇒ルソーはまず、「感覚」は自分のうちにおこり、それは自分の存在を感じさせるが、「感覚」の原因つまり「感覚」の対象は自分の外にあり、自分とは同じものではない、ということを「確信」する。

「そこで、わたしのうちにある感覚とわたしの外にあるその原因、つまり対象、とは同じものではないということがはっきりとわたしにわかる。そこで、ただわたしが存在するだけではなく、ほかの存在、つまりわたしの感覚の対象、も存在することになる」(E., tIV, P. 571, 岩・中, P. 129)

こうしてルソーは「自己存在」の「確信」から発して、「自己存在」と並ぶ、自己と区別された「感覚」の対象たる「物質」<sup>(26)</sup> (あるいは「物体」)<sup>(27)</sup>——「天地宇宙」<sup>(27)</sup>——の存在を「確信」するのである<sup>(28)</sup>。

2. 「自発的・意志的運動」が存在することの「確信」。⇒次いでルソーは「感覚」の対象たる「天地宇宙」に目を移し、それについて考察を始める。するとルソーは考察しようとする、「能動的力」(「比較し判断する力」)が自分にそなわっている<sup>(29)</sup>ことを知る。そういう「能動的な力」としての思索は次のことを判断する。「天地宇宙」は静止を含めて運動しており、その運動には二つの種類がある。一方における受動的な「ほかから伝えられる運動」と他方における能動的な「自発的あるいは意志的な運動」<sup>(30)</sup>の二種類である。「前者では動因は動かされる物体の外にあるが、後者では物質そのもののうちにある」(E., tIV, P. 574, 岩・中, P. 133~4)。

では「物質そのもののうちにある」能動的運動の「動因」をどうやって知ることができるのか<sup>(31)</sup>。「自発的な運動」が存在することの「確信」について、ルソーは次のようにこたえている。

「あなたがさらに、ではどうしてわたしは自発的な運動が存在することを知っているのか、とたずねるとしたら、わたしはそれを感じているから知っているのだと答えよう」(E., tIV, P. 574, 岩・中, P. 134)。

ルソーは「自発的な運動」の存在を自分の「内感」によって感じとりその存在を「確信」してい

るのである。このルソーの「内感」にもとづく「内面的確信」こそ、次にのべるように、「天地宇宙の運動」の外部的な究極の原因、究極の意志の存在を感じとらせ、ルソーをしてそのことを「確信」せしめるものなのである。

3. 「天地宇宙を動かす意志（＝神）の存在」の「確信」：「第一の教理」⇒「天地宇宙」は運動している。しかしそれは「ほかから伝えられる運動」の連動である。物質界は運動をうけとり連動しているが運動そのものを生み出すことはない<sup>(32)</sup>。この観察による事実からルソーは次のように推論する。

「たがいにはたらきかけている自然の力の作用と反作用を観察すればするほど、ますますわたしは、ある結果から別の結果へとさかのぼって、いつもなんらかの意志を最初の原因としなければならないことを知る」（E., t. IV, P. 576, 岩. 中, P. 136）。

この推論（「思索」による結論）は2. でのべたかの「内面的確信」——「自発的な運動」が存在することの「確信」——によって承認される<sup>(33)</sup>。

かくしてルソーは第一の教理（第一の信条）——「確信」にもとづく「真理」——をうる。

「なんらかの意志が宇宙を動かし、自然に生命をあたえているものと信じる。これがわたしの第一の教理、つまり、わたしの第一の信条だ」（E., t. IV, P. 576, 岩. 中, P. 136）。

この「天地宇宙」を動かす究極の意志が存在することの「確信」は究極の「能動的な存在者」の「存在確信」につらなる。ルソーはいう。「宇宙を動かし、万物に秩序を与えている存在者、この存在者をわたしは神と呼ぶ」と。

4. 「神の英知」の「確信」：「第二の信条」⇒何故「天地宇宙」は存在するのか、「天地宇宙」の目的は何か、それについては知りえない。しかし、「天地宇宙」を構成しているそれぞれの存在が、互に助けあっている内密の対応関係はみとめることができる。「天地宇宙」はちょうど時計のようなものだ。それを構成しているそれぞれの存在（歯車）が「共同の目的のために歩調をそろえて」協働・協力している。「天地宇宙」は規則正しい、一様な、変わることはない法則に支配されて運動している。「天地宇宙」に秩序をあたえている「英知」を考えないでいることができるだろうか。

ルソーは自分自身のうちだけでなく森羅万象、山川草木、花鳥風月のなかに、神の「英知」を感じとり、それを確信している<sup>(34)</sup>。

かくて「第二の信条」（「確信」にもとづく「真理」）が示される。

「動く物質はある意志をわたしに示してくれるのだが、一定の法則に従って動く物質はある英知をわたしに示してくれる。これがわたしの第二の信条だ。」（E., t. IV, P. 578, 岩. 中, P. 139）。

こうしてルソーは思索——「想像力」による推論——と「感情」の協働から、「神」の存在と「その英知」を「確信」し<sup>(35)</sup>、ルソー「神話」の基礎をすえる。第三の信条<sup>(36)</sup>については項を変え

て論ずることにしよう。

### Ⅲ. 人間この「自由な者」 — 第三の信条 —

ルソーは、Ⅱでのべたように、「自分自身の内部」や天地宇宙のいたるところに、「神を感じ」<sup>(37)</sup>、その「内的感情」にささえられて、「神」という名称に英知と力と意志と善性の観念を結びつける<sup>(38)</sup>。そしてあらゆる善性の源泉にして全知・全能の神によって、自分（人間）は「天地宇宙」のなかで「第一の地位」を与えられていることを見出す。

何故人間は「天地宇宙」のなかで「第一位の位置」を占めているといえるのか。

何故ならひとり人間のみが「意志」と「意志を実行するためにもちいることのできる道具」とをもつことによって「自分の周囲にあるすべてのものに働きかけることができる」からである、また、「知性」をもつことによってあらゆるものを調べてみるができるからである。さらにいえば、「秩序、美、徳」を感じることができ、善をおこなうことができるからなのだ。

以上を要約して一言でいえば、ひとり人間のみが「自由な者」として「神」——非物質的な実態——によって「生命」を与えられているからだ。これがルソーの「第三の信条」の核心をなす。

我々はルソーの「第三の信条」をさらに理解するためには、ルソーの「自由」の意味を知らなければならぬ。ルソーにあって「自由」とはいったい何を意味しているのであろうかと問うことによって。

以下ルソーの「自由」論を論ずることにしよう。

ルソーの「自由」論の根底にはルソーの自己観察をつうじての「人間」観が息づいている。ルソーは人間的生命——人間的本性——に、相互に相反する、二つの根源的なもの（実体）が存在することをみている。一方は能動的な「魂」的生命——「意志」や「理性」——であり、他方は受動的な「肉体的」生命——「感情」や「情念」——である<sup>(39)</sup>。人間は肉体と魂という二つの実体から構成されているとルソーはみているのである。

「肉体」と「魂」という二つの実体の相剋により、「社会人」と「有徳人」の間を揺れ動く、ルソー（人間）の心の叫びをきこう。

「この二つの相反する衝動によってひきずられ、悩まされて自分を知って、わたしはこんなことをつぶやいていた。そうだ、人間は一つのものではない。わたしはあることを願いながらも願ってはいない。わたしは自分が同時に奴隷でもあり、自由でもあると感じている。わたしはよいことを知っているし、それを好んでもいる。しかもわたしは、悪いことをしている。わたしは理性に耳をかたむけているときは能動的だが、情念にひきずられているときは受動的だ。そして、わたしが屈服するとき、なによりも耐えがたい苦しみは、自分は抵抗することもできたのだ、と感じていることだ。」（E., t. IV, P. 583, 岩・中, P. 147）。

上の引用文からごくおおざっぱに結論をいえば、ルソーにあって「自由」とは「自分自身の支配



者」になるということである。つまり相反する二つの実体の相剋のなかにあって、「能動的な魂」（良心と理性）によって「受動的な肉体」（情念）を支配している時、その人（「有徳人」）は「自由」であり、その反対に「情念」にひきづられている時、その人（「社会人」）は「不自由」である、ということになる。

しかし、ルソーにおける「自由」についての議論は、このままでは全く不十分である。以下ルソーの三つの言葉を検討することによって、ルソーのいう「自由」の意味をほり下げることにしよう。

まず「自由」とその危険について言及する、ルソーの次の言葉を紹介しよう。

「感じたり感じなかったりすることはわたしの自由にはならないが、わたしの感じていることをよく検討したりしなかったりするのはわたしの自由だ。……………ただわたしは、真理は事物のうちにあるのであって、それを判断するわたしの精神のうちにあるのではないということ、そして、わたしが事物についてくだす判断に自分のものをもちこむことが少なければ少ないほどいっそう確実に真理に接近することができるということを知っている」（E., t. IV, P. 573, 岩・中, P. 132）。

「事物」→「感覚」→「感情」の流れは人間の自由にはならない。それだけに「事物」のうちにある「真理」はストレートに「感情」によって感じられる。そこには誤りがない<sup>(40)</sup>。他方「事物」や「感覚」や「感情」を判断し、検討すること（悟性や理性の働き）は人間の自由である。しかし人間の「自由」は誤りを生む。それが「自由」の濫用・誤用・悪用につらなる。ここでルソーは人間の「自由」を知的能力（悟性や理性）にもとめているのであるが、その「自由」は<sup>(41)</sup>誤謬につらなるという危険をみているのである。

次に、上の言葉に呼応して、「自由」のなんたるかを端的に示す言葉を紹介しよう。

「たしかに、わたしにとってよいことを望まないでいることはわたしの自由にはできない。わたしにとって悪いことを望むことはわたしの自由にはできない。しかし、わたしに適したこと、あるいはそう考えられることのほかには望むことができないということ、わたしの外にあるなものによっても決定されないでそうすること、まさにそういうところにわたしの自由があるのだ」（E., t. IV, P. 586, 岩・中, P. 151）。

わたしの心の働き（「よいことを望まないでいること」あるいはまた「悪いことを望むこと」）は外部的な要因によって与えられ、自分の自由にはならない。しかし人間はその外にあるなものによっても決定（「意志決定」→行為）されないで、自分の内なる原因、自分の内部にある力（知的能力）によって決定（「意思決定」→行為）することができる。そこに「自由」があるというのである。

最後に上の二つの言葉を統合する、ルソーの「自由」についての決定的な言葉を紹介しよう。

「わたしが意志というものを知っているのは、自分の意志を感じているからにほかならない。それに、悟性というものも、もっとよくわたしに知られているわけではない。どんな原因がわたしの意志を決定するのか、ときかれたら、わたしは、どんな原因がわたしの判断を決定

するのか、と反問しよう。この二つの原因は一つのものにすぎないことは明らかなのだ。そして、人間がその判断において能動的であること、人間の悟性とは比較したり判断したりする力にほかならないことをよく理解すれば、人間の自由とはそれと同じような力にほかならないことが、あるいはそこから派生していることがわかるだろう。人間は真実を判断したときにより良いことを選び、判断を誤れば選択を誤るのだ」(E., t. IV, P. 586, 岩・中, P. 150)。

ここでルソーが「自由」について論じていることは次の4つの論点に要約ができる。1. 「意志」と「悟性」という二つの原因は「一つのもの」である。2. 人間の「自由」とは人間の「選択する」能力である「意志」とその原因となる「悟性」(「判断力」)という「力」(「能力」)である<sup>(42)</sup>。3. あるいはそこから派生したものである。4. 人間は「真実」を判断した時は「よい意志決定」をし——「よいことを選び」——、判断を誤れば「誤った意志決定」をする——選択を誤る——。

以上4つの論点のなかで、ルソーが「自由」についてのべている肝心要はいうまでもなく、論点2である。ルソーにあって「自由」とは「選択する」能力である「意志」とその原因となる「悟性」という、人間内部の、「能動的力」を意味しているのである<sup>(43)</sup>。

それでは「自由」という「能動的力」である、「悟性」と「意志」との関係はどうなっているのか。ルソーはつづけていう。

「そこで、人間の意志を決定する原因はなにか。それはかれの判断だ。では、判断を決定する原因はなにか。それはかれの知的能力だ、判断する力だ。決定する原因は人間自身のうちにある」(E., t. IV, P. 586, 岩・中, P. 150~1)。

ルソーはここで、(意志→)知的能力=判断する力→判断→意志(選択)→行動という図式を考えている。そして結論づける。決定する原因つまり「自由」は人間自身のうちにあると。そしてあらゆる行動の根源は自由な存在者の意志にあるが、逆に自由がなければ本当の意志はないと。

こうしてルソーは人間の「自由」についての長い思索の後に、ついに、第三の信条にたどりつく。

「人間はだからその行動において自由なのであって、自由な者として、非物質的な実体によって生命をあたえられている。これがわたしの第三の信条だ」(E., t. IV, P. 586, 岩・中, P. 151)。

ここでルソーは、人間は「自由な者」として非物質的な実体によって魂=精神生命を与えられていると述べているのである。ルソーは自分自身のうちに肉体的生命と区別された自分の魂を感じ、「自由な者」としてこの「第三の信条」を確信しているのである。その意味でこの「第三の信条」もまたルソーの「確信」に支えられた真理なのだ<sup>(44)</sup>。

この人間に与えられた魂=精神的生命は肉体的生命が亡んだあとも生き残る、というよりは、肉体的束縛から解放されてさらに自由になる、とルソーによって「確信」されている。「第三の信条」はルソーの「魂の保存」の思想につらなるのである。

ルソーの「生死」観とそれを根底から支えるルソーの「魂の保存」の思想については、項をあら

ためて論ずることにする。

#### IV. ルソーの「生死」観 — 「魂の保存」と「神の裁き」 —

「外部の力」によって決定されて動くところに「不自由」があり、「内部の力」によって決定し行なうところに「自由」がある。この「自由」という「内部の力」にルソーは「非物質的実体」によって分与された「魂」をみとめ、次のことを「確信」するに至る。「魂は非物質的なものであるから、それは肉体が滅びたあとにも生き残る」、「肉体と魂の結合が破れるとき、肉体は分解し、魂は保存される」（E., t. IV, P. 589, 岩・中, P. 156～7）と。それだけではない。ルソーはさらに人間は生きているあいだは半分しか生きていない、魂の生活の全面的回復は肉体の死をまっとはじめて始まる、ということを「確信」しているのである<sup>(45)</sup>。

ルソーの「生死」観はルソーの以上ごとき「魂の保存」の「確信」によって支えられている。

ルソーの「生死」観で、特に我々の注目をひくのは、ルソーの「現世否定」的とも称すべき思想である。ルソーの生涯をみると、ルソーは人生のある時期——レ・シャルメットに於る「若きルソーの挫折」——に「人生の目的をこの世に求めてはならないと悟り」、「愛着をこの世からひきはなす方向」にむかっており、この世には大きな価値はない、と「確信」し、「現世の幸福」は自分にとって決して「大きな価値があるとは思わない」といい切っている。

ルソーのこの「現世否定」的とも称すべき思想は現世に価値をおき、「現世の幸福」—諸欲求の満足—を追究する現世中心的な啓蒙思想にあって異彩をはなっている。しかしそこにこそルソー思想のベースがあり、ルソー思想の特色があるのである。

「現世での幸福」—諸情念の満足—は真の幸福ではない、だから、それを人生の目的にしてはならないという思想から、エミールの先生は「家庭生活」での幸福という正に「現世での幸福」の絶頂に達しようとしているエミールに対し、次のようにいう。

「死すべき存在、滅び去る存在であるわたしは、すべてが変わっていき、過ぎ去っていくこの地上にあって、自分もそこからあしたにも消えていくこの地上にあって、永遠の絆をつくりあげようなど考えるべきだろうか。……………幸福にとらえられることなく、幸福をとらえることになり、なにものもとどめておくことのできない人間は、失うことを知っているものを楽しめるだけだということを知ることになる。……………人をだますいろいろな億見を克服したきみは、さらに、この世に大きな価値をあたえている臆見を克服することになる。きみは安らかに人生をすごし、恐れることもなく人生を終えることになる。どんなことにも執着しないように、人生にも執着しないことになる。ほかの連中が、恐怖にとらえられ、この世を去ることによって存在しなくなるのだと考えるとき、この世のむなしさを知っているきみは、これから生きはじめるのだと考えるだろう。死は悪人の生の終わりだが、正しい人の生の始まりなのだ」（E., t. IV, P. 820, 岩・下, P. 201～2）。

この世での幸福は永遠につづくようにみえる時があったとしてもそれは幻想にすぎない。何故ならこの世はすべてが変わっていき、過ぎ去っていき、むなしいものであるからだ。だから人生に執

着しないように、どんなことにも執着しないように。「この世に大きな価値をあたえている臆見を克服する」ことが大切だ。

現世での幸福—諸欲求諸情念の満足—追及をいましめ、「死後の世界の幸福」を現世で生きることがをすすめているルソーのこの思想はダンマの顕現による「煩惱」からの解放に安心を見い出す仏教思想にかぎりなく接近している<sup>(46)</sup>。

さらに、死は「悪人」——ここで「悪人」とは社会生活のなかで「利己心」中心に生きて邪悪になったブルジョア的現世中心主義者と考えてよい——にとって「生の終り」だが、「正しい人」——「有徳人」——にとっては「生の始まり」なのだとするルソーのこの「生死」観は『新エロイズ』に於るジュリの次の言葉に連動している。

「けれども、実を申せば、わたくしは、嘗て地上に住んでいた肉体から自由になつた靈魂が再び地上に戻ってきて、さまよい、恐らく嘗て愛しく思った人のまわりに留まるということがあり得ると推定することに不合理なところがあるとは思わないのです」(N., t. II, P. 728, 岩. 四, P. 250)。

ルソーが求めてやまない「心と心の融和」、「魂と魂の交感」は現世を生きる人間同志だけのあいだにかぎらないのだ。それ故、ルソーは死を恐れない。

「あなたは死ぬのを喜んでいる」とジュリにむかって叫ぶヴォルマール——ジュリの夫——の言葉は、実は、ルソー自身の心の叫びでもあったのだ。自分も死を待ち望んでいると<sup>(47)</sup>。

ルソーの「生死」観で次に我々の注目をひくのは神の「神議論」にからむ、死後の世界に於る「裁き」の問題である<sup>(48)</sup>。以下その論旨を要約しておく。

神は「善性」の源である。それ故「万物をつくる者の手をはなれるときはすべてよいものである」。以上はルソーの「確信」する真理である。しかし「人間の手につるとすへてが悪くなる」<sup>(49)</sup>。悪や不正はすべて「人間の手」つまり「人為・文明」に由来する<sup>(50)</sup>。これもまたルソーが「確信」する真理である。ルソーの「神義論」は以上のルソーの「確信」によって支えられている。

人は「善の観念」を神から与えられ、魂のうちにしるされている「正しくあれ、そうればお前は幸福になれる」ということばを信じて生きている。それが「有徳人」だ。それなのに何故悪が生れるのか。「人の手」(「人為・文明」)のおかげである。それではそれは何故悪を生むのか。

それは多くのブルジョア的人間が「自由」いう能力(内なる能動的力)——その発揮が人為・文明である——を濫用・誤用・悪用しているからである<sup>(51)</sup>。(だから人間がいまわしい進歩をやめれば、「人為・文明」をすてればなにもかもよくなるのだ<sup>(52)</sup>。)

こうしてルソーは悪のすべてを「人の手」に由来するとして神の「善」、神の「正義」を弁論する<sup>(53)</sup>。

しかし、ここに、「現世」に於る「『善人』の滅び『悪人』の栄え」の問題が残される。「現世」にあっては「美德」が亡び「悪徳」が栄えている、「良心」に従って正しく生きている人はいつも迫害され、悪人は栄えている。

何故だ。正しく生きれば幸福になれるはずではなかったのか。神の摂理はどうなっているのか。  
この不条理のなかで「善」を生きる「善人」、「正義」を生きる「有徳人」の心に怒りが湧きあがる。

「期待が裏切られたとき、どんなに激しい怒りがわたしたちの心に燃えあがってくることだろう。良心は自分をつくってくれた者に反抗してたちあがり、不平を言う。良心はうめき声をあげながら、その者にむかって叫ぶ、おんみはわたしをだましたのだ、と」(E., t. IV, P. 589, 岩. 中, P. 155)。

この「不条理」はルソーの「魂の保存」の思想によって解決される。

ルソーは「わたしたちにとってすべて現世と共に終るのではない」、肉体の束縛から解放され良心の声がその力と権威を回復する「魂の生活」のなかで、「現世」での行いの「報酬」と「裁き」がおこなわれるのだとルソーは「確信」しているのである。

それではその「善人・義人」に対する「報酬」と「悪人」に対する「裁き」はいかにおこなわれるというのであろうか。

「ところで、わたしが死んだあとで、生きているあいだ自分はどのようなものであったかを思い出さずなら、わたしが感じたこと、したがってまた、わたしがしたことも思い出さずにはいられないのだが、わたしは、そういう思い出がいつかは善人の喜びとなり、悪人の苦しみとなることを疑わない。……………そのときこそ、自分にたいする満足感から生まれる純粋な楽しめと、いやしいことをしたというにがい後悔の念が、くみつくすことのできない感情によって、各人が自分でつくりあげた運命を区別することになる」(E., t. IV, P. 590~1, 岩. 中, P. 158)。

現世での「正しいおこない」の思い出が「義人」の喜び——「報酬」——となり、「いやしいことをしたという後悔の念」が「悪人」の苦しみ——「裁き」——となり、こうして死後の世界で神の摂理の正しさが証明される<sup>(54)</sup>。ルソーはそう「確信」したのである。

これはみずから「有徳人」として「正義」を生きようと志向したために、かえって、現世で報われなかった、ルソーの心のなぐさめとなる「確信」であったのである<sup>(55)</sup>。

## V. ルソーの「良心」論<sup>(56)</sup>

### 1. 「自然法」と「良心」 — 行為の格率 —

「内なる光」（「感覚」＋「理性」）と「内面の感情」との協働——直覚的明証性——によって「主な真理」（「三つの信条」）を導き出した後、ルソーは次いで当初の目標であった行為の格率——「わたしを地上においた者の意図にそってこの世におけるわたしの使命をはたすためにはどういう規則を自分に課さなければならないか」——の探求にのり出す。ルソーはその「規則」が「自分の心に

消しさることのできない文字でしるされているのをみ出す」という。その結論ともいえる言葉を紹介しよう。

「しかし、自然と秩序の永遠の掟（法）が存在する。賢い者にとってはそれが書かれた法に代わるものとなる。それは良心と理性とによって心の底に記されている。その掟にこそ、自由になるために、賢い者は従わなければならない」（E., t. IV, P. 857, 岩下, P. 257）。

ルソーはここで「実定法」に代る「自然法」——「自然と秩序の永遠の掟」——が存在する、それは良心と理性とによっては心の底に記されている、「自由」になるためには人間はそれに従わなければならない、といている。

我々はルソーにあって「自由」とは「意志」と「悟性・理性」という内面の能動的力であり、それから派生したもの——「能動的力」の行使——であることはすでに論じた。

それでは「自由」になるためには従わなければならない、しかも、「良心」と「理性」とによって心に刻まれている「自然法」とは何なのであるのか。

我々はまずここでルソーにあって「自然法」がどのようにとらえられているかを論じ、それが「良心」といかなる関係にあるかをさぐることから始めよう。

ルソーの「自然法」に関する議論はホッブズやロックらの近代「自然法」批判として出立する。その批判の核心はホッブズやロックらが論ずるとき「理性（の推論）」によって獲得された「理性の自然法」は「自然法」の本来性——「自然法」の「自然法」たる所謂となるその根源性——を失っている、というところにある。ホッブズやロックらが「理性（の推論）」によってとらえる「理性の自然法」は「文明（社会）」の進歩にともなって出現する、人々の不正や利害が人間の自然を窒息させてしまったあとで、つまり、人間の心に宿る「本来の自然法」<sup>(57)</sup>を消し去ってしまったあとで、やむをえず別の基礎の上にたて直したものであり<sup>(58)</sup>、それ故それは「自然法」の「自然法」たる所謂を失ってしまっているとルソーは主張するのである。

ルソーは「本来の自然法」を保存する、「理性の自然法」を志向しているのである。

それではルソーにあって「理性の自然法」の先駆をなす、「本来の自然法」とは何なのであるのか。

「自然法」はそれが「自然的」なものであるためにはその法が「自然の声」を通して直接に話しかけるものでなければならない、別言すれば、理性に先だつ二つの原理——「自己愛」と「憐れみ」という感情——に従って生きる「自然人」がその自然感情をとおして受け入れた法ではなければならない。これがルソーの「確信」するところである。

さてここで我々は次のことを思いおこそう。

「自己愛」にもとづく「自己保存」は人間の第一の義務であり、「憐れみ」という本源的感情は「他人の生命の尊重」→「種族の相互保存」に協力するものだ<sup>(59)</sup>、とルソーがくりかえし強調していることを。「自己保存」にむかう「自己愛」と「共同保存」にむかう「憐れみ」とは「自他の保

存」を命ずる「自然法」を感受・実践する、人間の本源的な感情であり衝動なのだ。ルソーはこの「理性」に先つ「自然人」の純粋な感受⇒衝動に「本来の自然法」の原基をみたのである。

ルソーは「自己愛」と「憐れみ」という二つの原理（自然感情）が感受したものに「自然法」の諸規則のすべてが原初のかたちで存在すると考え、次のようにいっている。

「右の二つの原理を、われわれの精神が協力させたり、組み合わせたり、できることから、自然法のすべての規則が生じてくるように思われる」（I., t. III, P. 126～1, 岩., P. 131）。

ここに「本来の自然法」をベースとしてのそこから「理性の自然法」への発展の論理が端的に表現されている。

「自己愛」（「自己保存」）と「憐れみ」（「共同保存」）という自然の本源的な感情・衝動をベースとしてそれに「精神」（「内なる光」）が協働して、それら「自己保存」と「共同保存」とを様々な組み合わせるなかで、「精神」（「内なる光」）は「自然法」の体系をつかみとることができる。それが自然の理法→倫理体系としての「理性の自然法」なのである。

ルソーはこのような「本来の自然法」をベースとする「理性の自然法」を志向したのだ。

ところで、「自己愛」と「憐れみ」という人間の自然の本源的な感情⇒行為衝動は、次に論ずるように、「良心」の源泉となるところのものでもある。ということはここでいう「本来の自然法」と「良心」の源泉とは同根なのだ。つまり、「自然法」を感受・実践する根源の衝動はそのまま「良心」の衝動につながるのである。

そのことからルソーにあって「良心」と「自然法」との関係は次のように結論づけることができる。理性がとらえた「理性の自然法」の掟が人間の心書きこまれる時、そこに「良心」が出現すると。

つまりルソーにあって「良心」とは「内面化された理性の自然法」以外の何者でもないのである<sup>(60)</sup>。

## 2. 「良心」の源 — 「自己愛」と「憐れみ」 —

まず「良心」とは何んであり、その源はなんであるかを告げるルソーの結論ともなる言葉を紹介することから始めよう。

「ところで、自分自身と自分と同じような者とにたいするこの二重の関係から形づくられる倫理体系から良心の衝動が生まれてくる。善を知ることとは善を愛することではない。人間は善について生得的な知識をもってはいない。けれども、理性がかれにそれを知らせるとすぐに、良心はそれにはたいする愛をかれに感じさせる。この感情こそ生得的なものなのだ。だから、友よ、わたしは、理性そのものからも独立している良心という直接的な原理を、わたしたちが本性の帰結によって説明するのは不可能だとは考えていない」（E., t. IV, P. 600, 岩. 中, P. 171～2）。

ここでルソーの論点は次の四点に要約できよう。①、「良心」という衝動は「自分自身と自分と同じような者に対する二重の関係から形づくられる倫理体系」から生れる、つまり、それは「自己愛（自己保存）」と「憐れみ（共同保存）」との組み合わせから「理性」が経験的に獲得する「理性の自然法」・「倫理体系」から生れる、というのが第1の論点であり、ルソー「良心」論の核心をなすものである。②、「善を知る」（「理性」の作用）ことと「善を愛する」（「良心」の作用）ことは別のことであり、人間は「善」についての生得的な知識をもっていない。「けれども、理性がかれにそれを知らせるとすぐに、良心はそれに対する愛を感じさせる」<sup>(61)</sup>。③、「良心」にはその源となる生得的な感情がある。「善に関する知」をうると善に対する愛を感じさせる、生得的な感情がそれだ。④、だから「理性」から独立した「良心」の原理を人間本性の帰結によって説明できる。

以上の四点である。

この四点の意味内容をさらにほり下げるべく我々は以下、論点④、に沿って、「良心の原理」を「人間本性の帰結」によって説明することを試みてみよう<sup>(62)</sup>。

ルソーの「良心」観は人間は善なる者として生れ、善への本能的な愛——「自己保存」をめざす「自己愛」とそれから派生する「共同保存」をめざす「憐れみ」という自然感情——に従って生きているという「確信」に根ざしている<sup>(63)</sup>。ルソーは「良心」の源を「自己愛」とそれから派生する「憐れみ」という「本源的善性」にみているのである。そのことはルソーが「自己愛」には二つの原理があるとして次のようにいっていることから確認することができよう。

「私はさらに、自己愛に本来的な、善悪に対する無関心から導きだせるようには思えないこの本源的な善性は何を意味しているのか説明しました。人間は単一な存在ではありません。人間は二つの実体から構成されています。たとえだれもがそれを認めるとは限らなくても、われわれ、すなわちあなたと私はその点で意見が一致しております。私はそのことを他の人々に証明するように努めました。そしてそのことが一度証明されれば、自己愛はもはや単一な情念ではない。これは二つの原理、すなわち知的存在と感覚的存在とを有しています。そしてその二つの存在の充足は同じではありません。感覚の欲望は身体の欲望にむかい、秩序への愛は魂への愛へむかいます。発達し活動的になったこの魂への愛は、良心という名称をもっています」(B. t. IV, P. 936, 全・七, P. 450～1)。

ルソーはここで「自己愛」は単一の感情・情念ではなく、二つの原理すなわち「感覚的存在」と「知的存在」を有し、一方は「身体的欲望」の充足にむかい、他方は「魂の愛」の充足にむかい、「自己愛」から発し、発達して活動的になった「魂の愛」が「良心」なのだといっているのである。

ルソーにあって「良心」とはこの「自己愛」という本源的感情が理性が獲得した「知恵」によって啓蒙されたものに他ならないのだ。

「だが良心は人間の知恵とともにしか発達せず、作用しません。人間が秩序の認識に到達するのはこの知恵によってであり、また良心が人間に秩序を愛するようにしむけるのは、人間が秩序を認識するときに限ります。それゆえ良心は、何も比較したことがなく、自分と他者と



の関係に気づいたことのない人間において存在しません」（B., t. IX, P. 936, 全・七, P. 451）。

「自然人」あるいは誕生時の人間には「良心」はいまだ形成されておらず、それは「文明化」の過程で、あるいは個人の成長の過程で経験的に獲得されていくものなのである。

それはいかにしてか。以下、その過程を論じよう。

そのためには、まず、「身体的欲望」から「魂の愛」への「自己愛」の発達の論理をもう少し掘り下げる必要がある。

### 3. 「感性」(sensibilité) の転換 — 「善」から「徳」 —

「自己愛」と「憐れみ」という本源的感情から「良心」への発展には「感性」の転換が必要であることを暗示する、ルソーの言葉を紹介しよう。

「それゆえ人間はすべからず感性をそなえています。おそらくみな同じ程度に、けれど感じ方は同じではありません。肉体的で器官的な感性があり、これは純粹に受動的で、快楽と苦痛に導かれてわれわれの身体と種属の保存だけを目的としているように見えるものです。もう一つ別に、私が能動的で精神的と呼ぶ感性があり、これは自分以外の存在に愛情をそそぐ能力にほかなりません。神経束の研究などでは認識できないこちらの感性は、物体の牽引力とのかかなり明瞭な類似を魂に与えているように思われます」（D., t. I, P. 805, 全・三, P. 156）。

その転換とは、ここである、受動的な「肉体的な感性」からの能動的な「精神的感性」への転換である。

ここで受動的な「肉体的感性」とは「快感原則」に従って「身体（自己）」と「種族（共同）」との保存をめざして生きている——本能的に善を生きている——、「自然人」レベルの感性をさしており、能動的な「精神的感性」とはすぐあとに論ずるように「有徳人」の前提となる感性をさしていると考えられる<sup>(64)</sup>。

「良心」は受動的な「肉体的な感性」がそれをベースとして能動的な「精神的感性」に転換されて、はじめて、出現するものなのである。

それではその転換はいかになされるのか。

実は、それこそ、思春期の到来と共になされる、「感情教育」のテーマなのである<sup>(65)</sup>。

いまここで、その論点のみを簡単に示しておく。思春期になると、人はありあまる「生命力」と少年時代にすでにきたえられている「想像力」とによって、自分を自分の外につれ出すようになる。それと共に「憐れみ」の感情が活発になり、「自分と同じような悩める人間」に心を通わせ、「共苦」するようになる。その「自分と似た人間」との「共苦」に於て青年は人類という「共通の統一体」に「同化」し、その「同化」の中で「人類愛」の感情を獲得する。この「自己愛」に通底した「人類愛」の感情こそ、「自分以外の存在に愛情をそそぐ」、能動的な「精神的感性」なのである。

こうした「感性」の転換によって、「善」から「徳」への第一歩がふみ出されることになる。

しかし「自分以外の存在に愛情をそそぐ能力」が「自己愛」→「憐れみ」という自己中心的な生得的な感情に支えられているかぎり、善良な「自然人」からの、正義と義務を生きる「有徳人」への転換はなされていない。「良心」は「人類愛」の上に形成されるとはいえ、そのかぎりでは、「良心」はいまだ形成されていないのだ。

「良心」は「人類愛」とは質のちがう能動的な「感性」の上になりたつのである。

#### 4. 中心の転換 — 「良心」の形成 —

「良心」は人類愛や真理愛といった、より高められた感情——能動的な「精神的感性」——による「理性教育」の結果として出現する。

「理性教育」というのは「内なる光」をたよりに「自然の理法」・「倫理体系」を経験的に把握せしめる教育である。

いったん「内なる光」(理性)が「自然の理法」・「倫理体系」を知えると、能動的な「精神的感性」に「良心」の燈がともされることになる。

そこで中心の転換がおこなわれるのである。

「自己」中心から「共通の統一体」——「神」・「天地宇宙」——中心への転換である<sup>(66)</sup>。自己がすべてである生き方——感情や情念に従って現世の快楽を追究する生き方——から「共通の統一体」という分母の一分子として生きる生き方——良心に従ってそこで果すべき義務・正義を生きる生き方——へと、生き方が180度転換するのである。

中心を転換した「有徳人」はいまや「神の道具」として義務と正義を生きている。

「人々の不正のためにわたしの心からほとんど消えさっていた自然の掟にもとづくすべての義務は、永遠の正義の名において、ふたたびわたしの心にしるされる。永遠の正義はわたしにそれを命じ、それをはたすわたしを見ている。いまではわたしは、自分のうちに偉大な存在者の作品と道具を感じるだけだ」(E., t. IV, P. 603, 岩・中, P. 176)。

「神」のあるいは「天地宇宙」という「共通の統一体」<sup>(67)</sup>の「道具」として自分の果すべき正義・義務・使命を生きる時、そこに「自然人」(「善」)から「有徳人」(「徳」)への再生がおこなわれる。そして再生した「有徳人」には中心の転換に伴ふ「良心」という神聖な本能が、その心の奥底に住みつくのである。

かくして「理性」ではなく「良心」が「無知無能ではあるが知性をもつ自由な存在」の確実な案内者になるのである。

「良心！良心！神聖な本能、滅びることなき天上の声、無知無能ではあるが知性をもつ自由な

## ルソー「文明論」の拠点（飯岡）

存在の確実な案内者、善悪の誤りなき判定者、人間を神と同じような者にしてくれるもの、おんみこそ人間の本性をすぐれたものとし、その行動に道徳性をあたえているのだ」（E., t. IV, P. 600, 岩・中, P. 172）。

人間を邪悪にする人間の悪しき情念はこの「良心」によって支配・克服され、かくして人間は「有徳人」として「自由」なのだ。

ルソーの文明批判の拠点はここ——「良心」にもとづく「道徳的自由」の要請——にある。

## 結び、「文明」と「良心」

ルソーは「文明」批判の拠点として、上述したごとき、「良心」にもとづく「道徳的自由」の要請を核とする「神話」を構築した。その「神話」の核心はくり返しくり返し我々に語りかけてくる言葉——「自分自身にたちかえって、情念を静めて自己の良心の声に耳をかたむけ、その声に従って生きなさい」——に要約されている。

「レ・シャルメット体験」⇒「ヴァンセンヌ体験」で自ら回心・再生したルソーは自分自身と文明社会に「良心」に従って正義と義務を生きる「有徳人」を——その意味に於る「倫理」の回復を——要請したのである。

そこで我々は「文明論」の観点からルソーの「良心」の問題を論じ直して本稿の結びとすることにしよう。

「文明論」的観点からみると、ルソーと他の啓蒙思想家とは人間の「感情・情念」（人間の「内なる自然」）の支配・克服の上に成立する「文明化」あるいは「文明的進歩」を要請した点では何ら変わるところがない。しかし両者は、ルソーがそれを支配・克服する力を「開かれた自我<sup>(68)</sup>→良心」に求めたのに対し他の啓蒙思想家がそれを「閉ざされた自我<sup>(69)</sup>→理性」に求めた点で別れる。

この別れは決定的である。この別れは、ルソー思想にあって何を意味するか、以下簡単にふれておく。

「良心」は「自己愛」と「憐れみ」という自然感情を源とする能動的な「精神的感性」——啓蒙化・文明化された感情<sup>(70)</sup>——をその母胎とすることは本論で論じた。ルソーにあってこの能動的な「精神的感性」は、実は、肯定的側面と否定的側面との二面性をもっており、「閉ざされた自我→理性」はその否定的側面——「利己愛」にもとづく「否定的な判断力・排斥力」——としてとらえられているのである<sup>(71)</sup>。

この否定的な排斥力としての「精神的感性」こそ邪悪な「社会人」（「文明人」）の「情念」であり、その「利己愛」と結びつく比較し反省する傾向—「理性」の作用—こそ、「文明的諸悪」の原因でもあり結果でもあると、ルソーは「確信」しているのである<sup>(72)</sup>。

ルソーにあって「良心」の母胎は相互に引力として仕く「精神的感性」——「心と心との融和」、「魂と魂との交感」にある「同一化の」、あるいは「共同体的」感情——にある。

この感情に理性がとらえる真理——「自然の理法」・「倫理体系」——がふれる時、そこに「良心」

が誕生し、「中心の転換」——「回心・再生」——がなされる。生き方の向きが変わるのである。その時、「神」あるいは「共通の統一体」の「道具」として、自分の果すべき「義務」を生きる「有徳人」が誕生するのである。その「有徳人」の心の拠点が「良心」なのであり、それこそ「神の意志」と自分の「意志」の接点であり、人間が「天地宇宙」で第一の地位を占めるゆえんなのだ<sup>(73)</sup>。

ルソーは「情念」に打ち克つには「理性」ではなく「火の魂」（「良心」）しかないとして次のようにいっている。

「闘って勝つことのできる者は火の魂の持主だけです。……冷たい理性は決して赫々たる事を何一つ行つたためしがないのであって、情熱に打克つには一つの情熱に別の情熱を対抗させない限り駄目なのです。徳に対する情念が盛り上るに至れば、ただそれのみが支配し、一切のものの平衡を保ちます。……ただ真の賢者のみが情熱を情念自身によって克服するすべを心得ているのです。」(N., t. II, P. 493, 岩. (三), P. 162)。

ルソーはエロスの「情念」（「内なる自然」）を支配・克服する力は「冷たい理性」ではなく、「良心」という別の能動的な「感情・情念」にのみあると「確信」しているのである。

（飯岡 秀夫）

飯岡論文（「『ルソー文明論』の拠点」）の注

- (1) ルソーの時代批判は「倫理」的観点に立つ、広くいえば「文明」批判だが、具体的には専制主義的な「政治制度」批判であり、さらにいえば「利己愛」の肯定に立する「欲望の体系」としての「ブルジョア」社会の批判であることは、これからの展開が示すところである。
- (2) また『ダランベールへの手紙』では次のようにいっている。「私はここで人は宗教なくしても有徳でありうると主張しているのではない。私は長いあいだこの過る考えを抱いていたが、いまではその迷妄からすっかり醒めている。」(d' A., t. V, P. 89, 全. 八, P. 118)。
- (3) ヴォルテールを巨峰とする、ディドロ、ドルバック、エルヴェシウスらのフランスの「フィロゾフ」らは、ジョン・ロックの決定的な影響を受けながら、「経験論」の立場に立って、「利己愛」に発する「利害関心」を唯一普遍の実践原理とする、「ブルジョア」的、功利主義的倫理・道徳構築の方にかじ先をむけようとしていた。ルソーはそれに対し「神の存在」を前提として成立する「良心」を対置、「ブルジョアの倫理・道徳」を撃つのである。
- (4) 「純粋な倫理」―「人間にとって有益な、そして人間をつくった者にふさわしい教理」―は、既存の「教説」によらなくても、「わたしは自分の能力を正しくもちいることによって、それらをひきだせるのではないか」(E., t. IV, P. 607, 岩. 中, P. 183) という確信をもって、ルソーは「神話」を構築したのである。
- (5) ルソーはボーモンへの手紙で次のようにいっている。「サヴォワの助任司祭の信仰告白は二部からなっています。もっとも長く、もっとも重要で、驚くべき新しい真実がもっとも多く含まれている最初の部分は、著者に可能な限りの全力をあげて近代の唯物論と戦い、神の存在と自然宗教を明らかにすることに当てられています。」(B., t. IV, P. 996, 全. 七, P. 57)。ここで、ルソーが構築した「神話」とは、厳密に言えば、「信仰告白」最初の部分、「近代の唯物論と戦い、神の存在と自然宗教を明らかにする」部分である。ルソーはそれについて次のようにいっている。「じっさい宗教に関して真に本質的なものを含むこの第一部は、断定的であり、かつ教条的です。著者は動揺せず、躊躇もしていません。彼の良心と彼の理性が断固として彼の態度を定めています。彼は信じ、断言し、強く確信している」(B., t. IV, P. 997, 全. 七, P. 528)。

## ルソー「文明論」の拠点（飯岡）

- (6) ルソーの「自然人」および「自然状態」については、著者はすでに詳論しておいた。拙著「ルソーの『純粹自然状態』について」（『高崎経済大学論集』第34巻2号、91.10、拙著『民主制の構想』高文堂出版社、99.4に所収）を参照のこと。
- (7) 「ブルジョワの人間像」の自己分裂—文明と自然との葛藤—について、ルソーは次のようにいっている。  
「社会状態にあつて自然の感情の優越性をもちつづけようとする人は、なにを望んでいいかわからない。たえず矛盾した気持ちをいだいて、いつも自分の好みと義務とのあいだを動揺して、けっして人間にも市民にもなれない。自分にとつてもほかの人にとつても役にたつ人間になれない。それが現代の人間、フランス人、イギリス人、ブルジョワだ。そんなものはなににもなれない。」（E., t. IV, P. 249～50, 岩. 中, P. 28）。
- (8) ルソーは「放浪時代」、自分の欲情をもてあまし、少女や婦人の前で「おかしな所作」をして見せ、「愚かしい快感」をむさぼった。情念に支配され、魂を腐敗・墮落させそうになったのだ。その思春期の危機の時代、ルソーの魂を救ってくれたのがゲーム師である。ルソーはゲーム師について次のようにいっている。「当時、わたしが無為のあまり邪道におちいりそうなのを救ってくれたことで、測りしれぬ恩恵をあたえてくれた」（C., t. I, P. 92, 岩上, P. 132）。
- (9) ルソーの原体験—「レ・シャルメット」体験—については、拙著「若きルソーの挫折—ルソーに於る学問的精神態度の生成—」（『現代社会学研究』創刊号, 1982）を参照ねがいたい。ルソーはそこで、「現世中心の人生観」から「現世否定の人生観」への転換——「再生」・「回心」——を経験している。
- (10) ルソーの「有徳人」への「再生」・「回心」—「現世中心の人生観」から「現世否定の人生観」への転換—を決定づけた「ヴァンセンヌ体験」については西川長夫氏の「ヴァンセンヌ体験の語るもの」（『立命館文学』第263号）および「『ヴァンセンヌ体験』再論」（同268号）を参照せねばならない。
- (11) ルソーの「直覚的確信」→「真理」の論理については本論Ⅰ. で論ずる。
- (12) 「ヴァンセンヌ体験」でのルソーの「直覚的確信」は我々に次の三つの「確信」→真理を告げている。1. 第1は「徳」の掟・原則はすべての人間の心のなかに刻みこまれているという「確信」→真理。ただし、V. で詳論するように、この言葉からルソーが人は「道徳観念」を生得的にもっていると主張している、とはやとちりしてはならない。ルソーはロックと共に、「自然法」あるいは倫理規範の生得的知識を否定している。生得なものは、善悪を判断する「内的な感情」であるのだ。2. それ故、第2に「徳」の掟・原則を知り、「有徳人」として「義務」を果たして生きるには「自分自身にたちかえって、情念を静めて、良心の声に耳をかたむけなさい」という「確信」→真理である。この言葉はルソーのキーワードとして、くりかえしリフレインされている。3. 第3は「学問」や「芸術」が風俗・習慣、人間倫理を腐敗・墮落させているという「確信」→真理である。ただし、唯一の例外を認めている。それはごく少数の偉大な「人類の教師」がおこなう「真の哲学」—徳を実践する魂の崇高な学問—である。
- (13) 「これ（ディジョンのアカデミーから出された懸賞論文の題）をよんだ瞬間、わたしは別の世界を見、別の人間になったのである」（C., t. I, P. 351, 岩. 中, P. 120）。
- (14) 「わたしの感情は、おどろくほどの速さで、思想とおなじ高さまでかけのぼった。とるに足らぬ情念はすべて、真理と自由と、美德とにたいする情熱によっておし殺されてしまった。しかもこの沸騰状態はわたしの心のなかで、四、五年以上もの間、かつてだれにも見られなかったほどの高い程度に、持続されたのである」（C., t. I, P. 351, 岩. 中, P. 120～1）。
- (15) 「わたしはこの自己改革を外部的なことにとどめはしなかった。外部的な改革を行なうためにさえ、たしかにもっと骨の折れる、しかしいっそう切実な、もうひとつの改革が、自分の考え方を変えることが、必要であるとわたしは感じた。」（R., t. I, P. 1015, 岩. P. 41）。
- (16) 「わたしの苦しい探求の結果はほぼ、のちに『サヴォワの助任司祭の信仰告白』のなかに書きとめたような

ものであった。」(R., t. I, P. 1018, 岩., P. 46)。

- (17) ルソーの「学問」(「哲学者」)批判の根底は、人間は限られた能力しかもっていないのに、あたかも「真理」をつかんだかのごとく自説を主張する、その傲慢さにむけられている。有限な能力しかもたない人間は、相対的な真実→真理しかつかめない。この謙虚さの欠如、それを支える、虚栄を批判しているのである。ルソーの激しい「哲学者」批判の言葉をきこう。「哲学者たちが真理を発見しうる状態にあるとしても、かれらのうちのだれが真理になど興味をもつものか。哲学者はみんな、自分の体系がほかの者の体系よりもいっそう根拠のあるものではないことをよく知っている。ただかれらは自分の体系だからそれを支持しているのだ。真実のもの、いつわりのものを知ったとしても、他人がみいだした真理よりも自分がみいだした虚偽をとらないような哲学者はひとりもない。自分の名声のためにあえて人類をあざむかないような哲学者がどこにいるのか。他人よりぬきでた者になりたいということとは別のことを心の奥底で考えている哲学者がどこにいるのか。一般の人々よりも高いところに身をおくことができさえすればいいのではないか。競争者の名声を失わせることができさえすればいいのではないか。哲学者はそれ以上のなにをもとめているのか。かんじんなことはほかの者とはちがったふうに考えることだ。かれらは、神を信じる人々のあいだでは無神論者になり、無神論者のあいだでは神を信じる者になるのだ。」(E., t. IV, P. 569, 岩. 中, P. 126)。ルソーは傲慢と虚栄の上にうちたてられた既存の教説に絶望しているのである。
- (18) 「さらにわたしは、哲学者たちはわたしを無益な疑いから解放してくれるどころではなく、わたしを苦しめていた疑いを深めるばかりで、それを一つも解決してはくれないことを知った。そこでわたしは、ほかの指導者をもとめることにして、こう考えた。内面の光りに教えを乞うことにしよう。」(E., t. IV, P. 569, 岩. 中, P. 126~7)。人々の権威を拒否し、「内なる光」を唯一信仰の導き手としようとする、ルソーのこの姿勢は、「聖書と理性」のみに頼ろうとする、「カルヴァン派」的信仰の流れをくむものと考えられる。ルソー自身も、次のようにいっている。「この地上に存在するもっとも道理にかなった、そしてもっとも神聖な宗教(カルヴァン派)のなかで生れるという幸せにめぐまれた私は、わが祖先たちの宗教にかく結びつけられています。彼らと同じように私も聖書と理性を私の信仰の唯一の規範にしています。彼らと同じように私も人々の権威を拒み、自分でそれを真理と認めないかぎり人々の決まり文句に従うつもりはありません。」(E., t. IV, P. 961, 全. 七, P. 483)。
- (19) lumière intérieure. 他に「原初の光」(lumières primitives)という表現もあるが、両者は殆んど同じものと解釈してよいだろう。あえて両者を区別すれば、「原初の光」が啓蒙されたものが「内なる光」ということになるであろうか。
- (20) クェーカー派信徒の信仰の拠点となる「内なる光」とは、「自然理性」を超えた「霊的働き」にあることは疑いない。しかし、ルソーはクェーカー派的意味で「内なる光」という言葉を使っているのではない。そのことはルソーが、ロックと共に、「狂信」を拒否していることから理解されよう。おそらくルソーは「内なる光」という言葉をロックのいう「自然の光」(感覚と理性)と同じ意味で使用していると思われる。しかし、ルソーが「原初の光」という時、それは自然人のもつ、自然感情(自己愛→憐れみ)を我々に想起させる。さらに「ある点からいえば、観念は感情であり、感情は観念である」<sup>(21)</sup>という思想がルソーにあることを思えば、ルソーの「内なる光」のなかには、「感情の光」あるいは「感情の力」(いわゆる能動的な「精神的感性」)が含まれるとも考えられる。つまり「原初の光」が「感情」と「観念」の弁証法的発展のなかで啓蒙されたものが「内なる光」(理性+感情)なのではあるまいかと。この問題は、今後の検討課題として残すとして、とらえず今は、ルソーの「内なる光」とは「感情」と区別された、「感覚」に出立する悟性や理性の働きとして、論をすすめていくことにする。
- (21) 「ある点からいえば、観念は感情であり、感情は観念である。この二つの名称は、知覚の対象のことも、その対象に心を動かされているわたしたち自身のこともわたしたちに考えさせるあらゆる知覚にあてはまる。そういう心の動きにふさわしい名称を決定するのはその順序にすぎないのだ。まず対象のことを考え、反省することによってのみわたしたちのことを考えるばあいには、それは観念であるが、はたいたいに、うけた印象が最初にわたしたちの注意を呼び起こすばあいには、そして、反省することによってのみその印象をひき起こす対象をひき起こす対象を考えるばあいには、それは感情である」(『エミール』, 岩. 中, P. 319)。

## ルソー「文明論」の拠点（飯岡）

- (22) ここでは詳論する余裕はないが、一言ふれておけば、思春期は受動的な「肉体的な感性」(sensibilité physique)から能動的な「精神的感性」(sensibilité morale)への転換の時期で、いわゆる「感情教育」がそれをなす。その結果出現する、能動的な「精神的感性」が「内なる光」を高める内的な推進力になっているのである。
- (23) 「わたしが企てた仕事は完全な隠退生活においてのみなしとげられるものであった。それは長期にわたる静かな瞑想を必要とした」(R., t. I, P. 1015, 岩., P. 41)。
- (24) ルソーは幼少期をふりかえって、次のようなことをいっている。「わたしはものを考える前にまず感じた。……まだ何も理解しないのにすべてを感じた」(C., t. I, P. 5, 岩. 上, P. 15) と。
- (25) 筆者のここでのまとめは荒筋であって、ルソーの独特の味は勿論その微妙な論理構成を切りおとしている。ルソーの構築した「神話」を味わい知りたい人は、自らその「原文」にあたるべきである。
- (26) 「さて、わたしがわたしとは別に感じるものでわたしの感官にはたらきかけるものをすべて、わたしは物質と呼ぶ。そして個別的な存在にまとめられていると考えられる物質の部分すべて、わたしは物体と呼ぶ。」(E., t. IV, P. 570, 岩. 中, P. 129)。
- (27) 「感官によってわたしがみとめられるものはすべて物質」であり、「天地宇宙」とは感覚の対象つまり、物質界そのものに他ならない。
- (28) 「これでわたしは、宇宙の存在についても自分自身の存在についてもまったく同じような確信をもつことができたことになる。」(E., t. IV, P. 571, 岩. 中, P. 130)。
- (29) 「自分の感覚を比較対照するわたしの精神の力にどういう名称をあたえてもいい。注意、省察、反省、そのほか好きなようにそれと呼んでいい。とにかく、そういう力はわたしのうちにある。」(E., t. IV, P. 573, 岩. 中, P. 132)。
- (30) 人間に生得的なこの人間の「自由」にかかわる「能動的力」については、Ⅲ、で論ずるとして、ここでは、それにふれないで論をすすめる。
- (31) 「運動」―「物体」と「物体」との連動―については感覚と理性で認識できても、「物質に内在する」運動の始原・動因は感覚を超えている。それにもかかわらず、どうして、それが「存在」するといえるのか。
- (32) 「運動の最初の原因は物質のうちにはない。物質は運動をうけとり、それをつたえるが、運動を生み出すことはない。」(E., t. IV, P. 576, 岩. 中, P. 136)。
- (33) 「そこで、世界の運動にはなにか外部的な原因があることになるが、それはわたしにはみとめられない。それにしても内面的な確信はその原因を十分あきらかにしてくれるので、わたしは、太陽がめぐっているのを見れば、それを推し進めている力を考えずにはいられないし、地球が廻っているなら、それを回転させている者の手が感じられると思っている」(E., t. IV, P. 575, 岩. 中, P. 135)。
- (34) 「だからわたしは、世界は力づよい賢明なある意志によって支配されていると信じる。わたしにはそれが見える。というより、それが感じられる」(E., t. IV, P. 580, 岩. 中, P. 136)。
- (35) 「個々の目的を、手段を、あらゆる種類の秩序づけられた関連を、くらべてみよう。そして内面の感情に耳をかたむけることにしよう。健全な精神がどうしてこの感情の証言を否定することができよう。偏見にくもらされていない目をもって見れば、はっきりと感じられる宇宙の秩序は至高の英知を示すことになるのではないか」(E., t. IV, P. 578~9, 岩. 中, P. 140)。
- (36) この、第一、第二、第三の信条がルソー「神話」を支える、三つの土台石である。これについてルソーは次のようにいっている。「これまでの三つの基本的な信条からそのほかのわたしの信条をすべて容易に導きだすことが

- できるだろう」(E., t. IV, P. 587, 岩. 中, P. 151) と。
- (37) 「わたしはいたるところでそのみわざによって神をみとめる。わたし自身のうちに神を感じる。どちらをむいてもわたしのまわりには神が見える。」(E., t. IV, P. 581, 岩. 中, P. 144)。
- (38) 「欲し、行なうことができる存在者、それ自身が能動的な存在者、つまり、それがどういうものだろうと、宇宙を動かし、万物に秩序をあたえている存在者、この存在者をわたしは神と呼ぶ。わたしはこの名称に英知と力と意志の観念をまとめて結びつけ、さらにその必然的な結果である善性の観念を結びつける」(E., t. IV, P. 581, 岩. 中, P. 143)。
- (39) 「人間の本性について深く考え、わたしはそこにはっきりとちがった二つの根源的なものがみだせると思った。一方は人間を高めて、永遠の真理を研究させ、正義と道徳的な美を愛させ、その観照が賢者の最大の喜びとなる知的な世界にむかわせる。ところが他方は、人間を低いところへ、自分自身のなかへ連れもどし、官能の支配に、その手先である情念に屈服させ、一方の根源から生まれる感情が人間に感じさせるものをなにもかも情念によってさまたげているのだ。」(E., t. IV, P. 583, 岩. 中, P. 147)。
- (40) ルソーが直覚的な確信の根拠(明証性)を、「理性」より「感情」に求めているのは、この点にある。ルソーはいつている。「理性よりも感情にたよるというわたしの規則は理性そのものによって確認されることになる」と。
- (41) 「理性はわたしたちをだますことがあまりに多い」と、ルソーが「理性」に全幅の信頼をおかないのは、この理由による。
- (42) ルソーにあって、「意志」の原因が「悟性」(「判断」)であり、また、「悟性」の原因が「意志」であり、二つの原因は「一つのもの」といつているから、人間の「自由」とは「意志」と「悟性」という二つの「力」をあわせたものと考えられ。しかし、「自由がなければほんとうの意志はない」と「自由」と「意志」をあえて区別しているところからみれば、「自由」とは「意志」の原因となる「悟性」(「判断力」)に限定すべきであるとも考えられる。
- (43) 人間は「自由」という力を「自由な能因」と「自己完成能力」として生得的にもっており、人生経験のなかでの「事物教育」、「感情教育」、「宗教教育」等によって、それを育成し、「自由」の領域をひろげていくものと、ルソーは考えているのである。
- (44) 「わたしは自分の魂を感じている。感情と思考によってそれを知っている」(E., t. IV, P. 590, 岩. 中, P. 157)。
- (45) 「だから、その結合が破れると、二つともその自然の状態に帰る。能動的で生きている実体は、受動的で死んだ実体を動かすのにもちいていた力を全面的に回復するのだ。ああ、悲しいことに、わたしは自分の不徳によつて十二分に感じている、人間は生きているあいだは、半分しか生きていないこと、そして魂の生活は肉体の死をまってはじまることを。」(E., t. IV, P. 590, 岩. 中, P. 157)。
- (46) ルソー思想の仏教思想への接近については、稿をあらためて論じたい。
- (47) 「わたしは、肉体の拘束から解放されて、矛盾のない、分裂のない『わたし』になるときを、幸福であるために自分以外のものを必要としなくなるときを待ちこがれていて。」(E., t. IV, P. 604, 岩. 中, P. 179)。
- (48) ルソーの「神義論」については、川合清隆氏の「『サヴォワ人助任司祭の信仰告白におけるルソーの神義論と良心論(上)』(『甲南大学紀要・文学編8』、'72)および「ルソーの弁神論—その革命性」(『思想』、'90.4, 790号)で詳しく論ぜられている。
- (49) 「神の手」になる「天地宇宙」の秩序と「人間の手」による「人類的地上」の無秩序を対照して、ルソーは次のようにいつている。  
「なんという光景! わたしがみていた秩序はどこにあるのか。自然の光景は調和と均衡を示すばかりだったが、人



## ルソー「文明論」の拠点（飯岡）

類の光景は混乱と無秩序を示すだけだ。……わたしは地上に悪をみている」（E., t. IV, P. 583, 岩. 中, P. 146～7）。

- (50) 「人間は、悪をもたらす者をもうさがすことはない。悪をもたらす者、それはきみ自身なのだ。きみが行っている悪、あるいはきみが悩まされている悪のほかには悪は存在しないし、それらの悪はいずれもきみ自身から生れるのだ」（E., t. IV, P. 588, 岩. 中, P. 154）。
- (51) 「わたしたちがみじめな者になり、悪人になるのは、わたしたちの能力をまちがってもちいるからだ」（E., t. IV, P. 587, 岩. 中, P. 153）。
- (52) 「わたしたちのいまわしい進歩をやめれば、わたしたちの迷いと不徳をあらためれば、人間のつくったものを捨てれば、なにもかもよくなるのだ」（E., t. IV, P. 588, 岩. 中, P. 154）。
- (53) ルソーにあって「正義」と「善」とはきりはなせないものとしてとらえられている。「秩序を生み出す秩序への愛が『善』と呼ばれ、秩序を維持していく秩序への愛が『正義』と呼ばれるのだ」（E., t. IV, P. 589, 岩. 中, P. 155）。
- (54) 「魂は非物質的なものであるなら、それは肉体が減じたあとにも生き残ることになるし、魂は肉体の減じたあとにも生き残るものなら、摂理の正しさが証明される」（E., t. IV, P. 589, 岩. 中, P. 156）。
- (55) 摂理の正しさが死後の世界で証明されると「わたしに考えられることだけで、十分わたしはこの人生になぐさめをみだし、あの世の生活に期待することができる。」（E., t. IV, P. 591, 岩. 中, P. 158）。「どんなに激しい苦しみも、それには大きなしかも確実なつぐないがあることを知っている者にたいしてはその力をうしなってしまう。そして、このつぐないにたいする確信こそ、先の省察によってわたしが収めた主要な成果なのであった」（R., t. I, P. 1020, 岩. P. 48）。
- (56) V. および、「結び」で論ずるルソーの「良心」論については、主として、以下の諸論文に教えられた。1. ロベール・デラテ『ルソーの合理主義』（木鐸社）、2. 川合清隆「『サヴォワ人助任司祭の信仰告白』におけるルソーの良心論」（『甲南大学紀要』文学編14）、3. 柳春生「ルソーにおける自然法思想」（九州大学『法政研究』41巻4号）、4. 並木治「ROUSSEAU における『理性』の問題—Emile を中心にして—」（『フランス語フランス文学研究』31）、5. 志賀淑子「『社会契約論』ジュネーブ草稿研究—自然法と Pitié—」（『フランス語フランス文学研究』39）、6. 仲島陽一「ルソーにおける『憐れみ』と『良心』」（『早稲田大学大学院研究科紀要』別15）。
- (57) 「本来の自然法 droit nature1 proprement dit」と「理性的自然法 droit nature1 raisonnée」については、『ジュネーブ草稿第Ⅱ編第14章（J., t. III, P. 329）を参照のこと。
- (58) 「後になって、理性がその継続的な発達によって、ついに自然を窒息させてしまったとき、理性はこれらの規則をまた別の基礎の上にたて直さなければならなくなるのである。」（I., t. III, P. 126, 岩., P. 31）。「社会の進歩は、個人的利害に目覚めさせることによって、心のなかの人類愛を窒息させること、自然法、あるいはむしろ理性の法と呼ぶべきこの法の観念は、情念がそれより先に発達し、この法の掟をすべて無力にしてしまうときになって、ようやく発展し始めるにすぎないことを、見いだすであろう。」（J., t. III, P. 284, 全. 五, P. 274）。
- (59) 「だから、あわれみが一つの自然的感情であることは確実であり、それは各個人における自己<sup>アムール・ド・ソワ・メーム</sup>愛の活動を調節し、種全体の相互保存に協力する。他人が苦しんでいるのを見てわれわれが、なんの反省もなく助けにゆくのは、この憐れみのためである」（I., t. III, P. 156, 岩., P. 74）。
- (60) ここで「良心」と「自然法」との区別および両者の関係を整理しておこう。「（理性の）自然法」とは「感情」と「理性」の共働によって、経験的に「内なる光」がつかみとった、「神→天地宇宙の理法」→「倫理体系」であり、「良心」とは、それが心に書きこまれたところに発する人間の感情・情念である。もう少し詳しくいえば、「内なる光」によって経験的に獲得された「（理性の）自然法」によって呼びおこされる「倫理愛」という感情・情念である。このことは以下で詳論される。

- (61) この部分は、①. の論点のリフレインである。つまり、全く同じことをくりかえしている。
- (62) 尤もルソーは、そのような説明は「どうしても必要なこと」であるわけではないといっている。何故なら、説明するまでもなく「内面的なあかしと、みずからのために証明する良心の声」とがすべてを語っているからだ。とはいえ、ルソーは『エミール』で、特にその「積極的教育」の箇所、で、「良心」育成論を論じているので、あえて、「良心」形成の論理を、以下、まとめてみることにする。
- (63) ルソーのその「確信」は、神→対象→感覚→感情の流れは「真理」をストレートに受けとめるから誤ることがなく、誤るのは、ただ、理性の判断だけであるという「確信」に対応している。ルソーが「理性」に信用をおかず、唯一「良心」を「案内者」とみとめるのはこの理由による。
- (64) 受動的な「肉体的感性」のもとに生きる「自然人」は「身体的な本能にのみ限られ、動物のようにおろかで、ゼロの存在」であるから無意識ではあるが本能的善を生きている。それに対し、能動的な「精神的感性」のもとに生きる「有徳人」は、「善」とは質を異にする「徳」を生きている。「感性」の転換は「善」から「徳」への前提をなすのである。
- (65) ルソーの家庭教育論は、少年時代の「消極的教育」の段階と青年期の「積極な教育」の段階との2段階から成立しており、思春期の到来と共に「積極的教育」がなされる。「感情教育」は「積極的教育」の最初にほどこされる教育である。詳しくは拙稿「ルソーの家庭教育論——その構想と構造——」（『高崎経済大学論集』第44巻第2号）を参照のこと。
- (66) 「自己愛」→「憐み」という本源的感情は「良心」の源泉であるとはいえ、それに従うかぎり自己中心的である。「内なる光」が「理性の自然法」をつかむ時、人は「共通の統一体」での、自分の果すべき義務・役割を悟り、その実践を行う。そこで「中心の転換」がなされ、「良心」が作動する。人はそこで回心し、再生するのである。
- (67) 「共通の統一体」には「神」・「天地宇宙」から「人類の一般社会」、さらには、「祖国・政治体」まで考えなければならない。その「共通の統一体」で与えられた、自分の果すべき義務への愛が「良心」であると、考えられるのである。
- (68) 「開かれた自我」とは「心と心との融和」、「魂と魂との交感」という言葉で表現される、人と人との「同化」に於る自我を意味する。別言すれば、それは、「人類愛」に通底した「自己愛」にもとづく自我である。
- (69) 「閉ざされた自我」とは「利己愛」によって、現世の楽しみを求めて自己中心的に自己の利害関心にのみ従って生き、心を「自我」の限界に閉じこめている「自我」であり、それはいわゆる「欲望の体系」を形成する。
- (70) 能動的な「精神的感性」は比較し反省する「悟性・理性」の作用という人為の結果出現する。その意味に於てそれは「啓蒙化・文明化された感情」なのだ。
- (71) 「もう一つ別に、私が能動的で精神的と呼ぶ感性があり、これは自分以外の存在に愛情をそそぐ能力にほかなりません。神経束の研究などでは認識できないこちらの感性は、物体の牽引力とのかなり明瞭な類似を魂に与えているように思われます。その力はわれわれが自分とほかの存在とのあいだに感じる関係に比例し、この関係の性質によって、磁石の両極のように、この力はあるときには肯定的に引力として働き、あるときには否定的に排斥力として働きます。肯定的な、つまり引きつける作用は、われわれの存在感情を他に拡大し強化することを求める自然の単純な働きであり、他人の存在感情を圧迫し狭める否定的ないし反撥的な作用は反省が生みだす合成物なのです。前者からはあらゆる優しく甘美な情念が生まれ、後者からは憎悪に満ちた残忍な情念のすべてが生じます。」(D., t. I, P. 805, 全. 三, P. 156)。
- (72) 「自然の善き情念を不自然な悪しき情念に変えてしまう、自分を比較したがる傾向というもののごどこから生じたのかとお訊ねなら、それは社会関係から、観念の進歩から、精神の陶冶からくると、お答えしましょう。」(D., t. I, P. 806, 全. 三, P. 157)。

#### ルソー「文明論」の拠点（飯岡）

- (73) ルソーは人間が神の意志に自分の意志を結びつけ、神がなす御業に、その道具として自分のつとめを果すところに、人間の「天地宇宙」での第一位を占めるゆえんをみ、そのことをなすために、神は人間に、良心と理性と自由をあたえてくれていると確信しているのである。「よいことを好むように良心を、それを知るように理性を、それを選ぶように自由を、かれはわたしにあたえているではないか。」(E., t. IV, P. 605, 岩. 中, P. 180)。